報告⑥

（特集）各地の高校魅力化プロジェクトを紹介　奥尻高等学校の町立移管と高校魅力化（下）

町立への移管の実際と住民の奥尻高校への想い（奥尻町教育委員会）

青山学院大学　樋田　大二郎

お話をうかがった桜花幸久奥尻町教育委員会事務局長によると、奥尻高校の町立移管は、町が統廃合の主導権を持ちたいという理由および中学卒業生が島外に出る状況を改善したいという理由で町長が町立移管の方針を打ち出し、北海道からも支援を得られて町立移管が実現した。保護者に年間およそ一五〇万円もの島外での高校生活の家計負担をかけさせないようにすることも理由であった。

町立移管の費用は、北海道からの支援があり建物（学校、校舎、土地）、教職員住宅、物品類が無償譲渡された。人的支援では、最初の三年は教員二人、職員一人、その後の二年は教員一人を道から単独で加配される。さらに施設等の支援という趣旨で道から二一〇〇万円を補助された。人件費については、高校の人件費は交付税措置があり、教職員人件費は一億一千万円くらいで、だいたい九〇〇〇万円ぐらいの交付税が入る。全国募集に伴う松風寮（寄宿舎）建設が当初予算で一億四二〇〇万円であった。二〇一七年度の決算だと、寮の事業を除くと維持費の支出を含めてだいたい三五〇〇万円を一般財源で補っている。桜花氏によると、北海道南西沖地震での財政出動があった町なので、「やっぱり財政負担というのは大き」いという。

教員の身分保障等については北海道道教育委員会が割愛人事を認めた。また、町の負担を条件に道の研修を利用できることとした。

桜花氏によると、割愛人事で先生の人事は全道一区で行うが、奥尻高校の状況を配慮してくれているのでありがたいということであった。

奥尻町は魅力が無いと高校生が進学しないと考えており、高校が隠

岐島前高校の魅力化プロジェクトなどを参考に高校中心で魅力的になることを考えていることをうれしく思っているという。取り組みが若い先生達のスキルアップにつながるのであればうれしいが、過度の負担については今後の支援体制を考えたいと語られた。

奥尻町の地域性についてたずねたところ、もともと子どもたちのためなら何かしてあげたいという大人が多い地域だという。そのような地域性の由来を尋ねたところ、「子どもをかわいくない大人はあまりいないような気がします」と高校生を支援する地域性を当然視する回答であった。調査者が、重ねて由来を尋ねたところ、「子どもたちに感謝されたら、うれしい気持ちになる」、「小さな町だから多くの方が知り合い」、「信頼関係は日々の積み重ね」との回答であった。そして、町民は奥尻高校生を町の子だと意識しているということであった。続けて、①もともと中学校までは市町村立の学校で、高校になると市町村立高校じゃないから知りませんよって話ではないと思う、②子どもたちは町の子どもたちです、③今来てる島留学生だって出身は違うが奥尻高校の生徒であり、一人の町民であるのに変わりはない、との説明が得られた。

桜花事務局長は、奥尻高校の将来の一番の課題は市町村立高校の施設整備だと考えている。生徒への様々な補助を行うことについては、補助で全国募集の生徒を取り合うのではなく、教育内容の魅力ある取り組みを充実させることが大切であり、充実については管理職の先生が若い先生を育てて教育内容の充実を図っていると考えている。

基本は、今までもそうですけども、高校は独自でいろいろやってるので、うちがそんなに入ったりすると、スピード感もなくなったりします。何かあったら責任を取るのは市町村立高校の設置者である教育委員会になります。……基本的には高校の自由な発想などを尊重し、それやっちゃ駄目、あれやっちゃ駄目とかというのは、今までもあまり言っていません。一定のルールはあるので、ここは相談しなきゃならないなというのがあったり、調整事項は教育委員会が入った方がスムーズにいったりするようなところがあればやっています。（インタビューより）

町や住民は島内中学卒業生だけでなく、島留学生を自分の子どものように感じている。そして、奥尻高校生の提案や発想を町の活性化の刺激として受け入れていると語られた。

1　町立への移管：生徒減による廃校の危機と廃校の影響について

――奥尻高校の場合は、道立から町立へ移管して、そのことがきっかけで大きく変わられたように聞いております。まず、町への移管の前後のことを教えていただければと思います。

桜花幸久事務局長：奥尻高校は、平成二八年四月に北海道立高校から奥尻町立高校になりました。それ以前より町立移管の準備は、何年もかけてやっていました。

なぜ町立移管したかというと、北海道の公立高校適正配置計画の中で、一間口校（筆者注　一学年一学級定員の学校のこと）でも、第一学年の生徒数が少なかったら、統廃合の対象になります。一間口四〇人のところ、通常であれば五〇パーセントを下回る場合ですが、僻地校や離島の場合は、一〇人を下回るような状況であれば、統廃合を検討しますという状況でした。

道立高校のままであれば、いつ統廃合のテーブルに上がるかわからない状況の中で、生徒数がどんどん減ってきている状況があって、このままでいったらいずれ統廃合になる可能性が高かったため、市町村立高校にして、学校存続の判断を町が決定できるよう決断しました。町長がそういう方針を打ち出したので、町立移管に向け準備しました。北海道も多くの支援をしてくれたので、二八年四月に町立移管が実現しました。

平成二七年度までは、町内中学三年生の生徒数の推移を見ると奥尻高校への入学生が一〇人を下回るという状況はなかったが、ただ義務教育じゃないので全員が全員、奥尻高校に進学するという状況ではないので、仮に中学三年生の卒業生が二〇人いても、一〇人以上が島の外の高校に進学することがあり得ます。そこは本人だったり保護者だったりが選べる部分なので、常にそういった不安を持ちながらの奥尻高校だったと思います。

町立移管は、仮に入学者が一〇人を下回っても、そこは道教委から統廃合というようなことにはならないというのが、一番（の理由）です。

仮に統廃合をして、奥尻高校がなくなりましたという状況を想定す

ると、現在一〇〇パーセントに近い割合で高校に進学すると思うので島に高校がないとなれば、一五歳から一八歳ぐらいまでの子どもが、進学のため全員島から出ます。そうなると、町として〇歳から一〇〇歳ぐらいまで年齢層がある中で、一番元気な一六歳から一八歳の世代が空白の世代になります。まちづくりの面で考えると、将来的にそういう子たちが、奥尻に戻ってきて島で働いたり暮らしたりする状況にはならないんじゃないのかなという考えがあります。高校が島にあることは、まちづくりの面でも不可欠であると考えます。あと仮に島の外に子どもを下宿とかさせた場合、年間に一五〇万円前後の負担が保護者には発生すると考えられます。

――年間で一五〇万円ぐらい。

桜花事務局長：はい。個人差だったり状況の違いはあるとは思います。しかし、そうなると家計への負担が大きく、それを機に一家転住してしまうことが想定されます。ますます過疎化、高齢化が進んでしまうので、高校があるだけで一家転住のような事態がなくなるのであれば、高校が存続する意義は大きいと考えます。

あと若い世代にしてみても、小学生以下の保護者にしてみても、自分の子どもが、数年後、高校入学となったとき、高校があるかないかわからない状況で、子育てするというのは、将来の不安を抱えたまま暮らすことになります。そういう若年層世代のためにも町立移管して、高校が存続することを示すことで、高校までは少なくとも地元で安心して暮らせる環境があると示すことも大事なのかなと考えています。

――そうですね。一家転住のおそれがあって、そうなるとよく聞くのは、おじいちゃん、おばあちゃんだけ残して、弟、妹も連れていなくなってしまうということが考えられます。隠岐島前高校がある島根県の島前地域の場合は、そのような結果人口が減って、船が毎日来なくなってしまうという、そういう将来予測を話されていたように思います。

あとこの島は、Ｉターン者とかＵターン者は多い島ですか？

桜花事務局長：あんまりいないですね。隠岐島前から見たら全然少ないと思います。

――隠岐島前高校の高校魅力化では高校が無くなると一家転住が起きることとＩターン者が来なくなるということを高校魅力化を訴えるポイントにされていたように思います。

桜花事務局長：過疎化、高齢化でいうと、どんどん子どもたちが減ってきている状況です。かつ、ここは航空自衛隊基地の縮小も囁かれ、ますます人が少なくなる状況という中で、外から人を呼ばないと町立に移管してもじり貧になるという背景もありました。平成二八年に町立移管しましたが生徒数は大変な状況でした。平成二九年度から全国募集して外から生徒を呼びましょうということになりました。

２　町立に移管する費用

――奥尻高校は、全国募集も含めて平成二八年、平成二九年、平成三〇年とフットワークが軽い感じでどんどん改革が進んだなというふ

うに見えていますが、これは何がそれを可能にさせたのでしょう？

桜花事務局長：町長や教育長のリーダーシップに依るところが大きく、道教委の支援もあり実現できたと考えます。

――町立に移管するということがどういうことかを教えて下さい。まず、町立に移管するということは、これは学校の予算のどの部分が、町の負担になるんでしょうか？

桜花事務局長：基本、全てです。

――そうなんですか。

桜花事務局長：はい。先生たちの給料も、大半は交付税措置されますが県費負担じゃなくなります。

――建物はそのまま町に？

桜花事務局長：町立移管で道がやってくれた支援策というと、主に三つあります。一つは、今言った建物の無償譲渡です。学校、校舎、土地も含めた学校校舎だったり、教職員住宅、それに中の物品類ですね。全て無償で譲渡してくれました。教員住宅の一部は、当時償還中の建物もありました。それらは町立移管後、すぐ無償譲渡というふうにはならなかったんですけども、道のほうでも繰り上げ償還する予算を追加で措置し、全額繰り上げ償還して、道の財産にしてから奥尻町に譲渡してくれました。

その次は人的支援で北海道が単独で職員を加配し、最初の三年は三人で、その内訳は教員二人と事務一人の三人となっています。その後の二年は、教員一人を道が単独で加配しています。今年から教員一人だけ道の加配支援を受けています。この五年間のうち、道が単独で加配するので、その間に町立高校としての学校運営地盤を築いてくださいという狙いからの支援策となります。

あともう一つが、金銭的支援になります。施設等の維持管理費も嵩むため、二二〇〇万円を補助してくれました。現在は基金として運用し、残高は今年度末で五〇〇万円弱となる見込みです。高校の施設整備の維持などに必要な経費です。中学校を敷地内に統合して新設し、中高連携の部分においても、経費に充ててほしいとの説明を受けています。大きくこの三つです。

――町の高校への支出って、年間どのぐらいの金額になりますでしょうか？

桜花事務局長：今年でいうと、一番は人件費になります。だいたい一億円ぐらいですが、教職員一人当たり六〇〇万円程度が交付税措置されています。高校の教員配置基準に基づく人数で措置されます。

――はい。

桜花事務局長：それの人数の分は、交付税措置されます。ですから、だいたい九〇〇〇万円ぐらいは、交付税で入って来ます。教職員人件

費の支出は一億円ちょっと、一億一〇〇〇万円弱ぐらいです。ということで、人件費の支出は町立移管で二〇〇〇万円くらい増えていることになります。あと去年と今年は寄宿舎を整備しています。

――寄宿舎の費用が高いんですね。

桜花事務局長：寄宿舎整備事業の予算が当初予算で一億四二〇〇万円となっています。寄宿舎事業が動いてなかったら、二九年度の決算だと、歳出で一億四〇〇〇万円強ですね。歳入が、一億一〇〇〇万円弱なので、だいたい三五〇〇万円ぐらい一般財源で補っています。

――なるほど。そうしますと、町立への移管の中では、全国募集が当面の大きな出費になったということでしょうか。

桜花事務局長：結果的にそうですよね。ただ、この全国募集も二九年度から始めていますが、例えば全国募集しないで町立高校のままであれば、もともと学区外就学という制度はあったので、道内であればどこの地域からでも奥尻高校に入学できました。

全国募集を開始するとき、受け入れ態勢が整ってなくて、全国募集と同時に、全部の旅館とか民宿をあたって、収入になるのでやりませんかといって声掛けをして、手を挙げてくれたところが何軒かあり、全部で二〇部屋を超えたため実現しました。学区外就学は定員の五〇パーセントまで受け入れできます。三年目を迎えたとき、旅館、民宿で協力できるところが限界を迎えたため、寄宿舎の建設をしようと判断しました。これが、去年新築し、今年また増築している寄宿舎の状

況です。

――昨日見てきました。

桜花事務局長：例えば生徒数が少なかったら増築事業は二年後三年後だったかもしれません。結果的に今年も一五名が入学したため増築事業に取りかかることになりました。

例えば町立移管だけで全国募集していなかったら、地元の子しかいない状況のまま推移して一学年一〇人程度の生徒数となると、仮に一五人としたら三学年で四五人ぐらいしかいない。幼稚園の頃から中学校までおなじ仲間で学年進行していく中で、それが嫌でどこかの高校に出たいという子どもも出てきます。

他にも部活動によって人数制限が生じ、合同チームを作り野球大会などに出場したりしますけども、ある程度の人数がいないと活発な活動ができません。

学習環境は整っていても、人としての成長をするための人間関係をつくるためにも、島の外から生徒がたくさん来てくれれば、人との関わりの中でいろんな刺激にもなり、それを見ている中学生や小学生も、奥尻高校に行ってみたいというふうに自然と足が向けば、お金で測れないような効果が期待されます。

――町立への移管に関わって、どのような苦労があったでしょうか？

桜花事務局長：色々な苦労は、当然あったと思います。町立高校への移管は、誰に聞いてもわからないし、そういう前例もないので、道の

担当者だったり、いろんな部署に相談したり、そういう人たちの支援や協力があって実現したと考えています。

あとマスコミの人たちも宣伝してくれたり、情報発信力という部分ではそういう力も結構ありがたかったと思います。

3　町としての町立高校の教育ビジョン

――町への移管が進行していって、その後、教育内容も大きく変わっていったと思います。俵谷校長先生、それから今の清水校長先生も、町立高校ということについてかなり考えてくださっている感じがしました。町としては高校教育のビジョンとして、町立高校となった奥尻高校はこういう方向で行きたいというようなことをあらかじめ計画していたものがあったのか、それとも、計画は走りながらできてきたのか、その辺りからお伺いしたいと思います。

桜花事務局長：基本的には普通科の高校なので、まずそこのベースは変えられないと考えています。魅力ある学校づくりというのがないとなかなか生徒を呼べないと思います。隠岐島前高校の魅力化プロジェクトなども参考に高校が中心となって考えています。

奥尻高校はスキューバダイビングを平成七年から取り組んでいます。スキューバダイビングをやっている高校は少ないので、それに魅力を感じて、奥尻高校に足を向ける子どもたちは多いと考えています。それだけじゃなく、まなびじま奥尻プロジェクトを推進しており魅力を感じる取り組みの一つになっていると考えています。

学校が中心となり、そういった取り組み活動をしてもらっていることは、町としてはすごくありがたいです。大半の若い先生たちも、いろんなことを若いうちに経験することで、自身のスキルアップにつながってもらえれば、うれしいと思います。ただ、働き方改革の中で、一定以上の労働はさせられない部分に対する今後の支援体制も検討して行きたいと考えます。

――次に、日々の奥尻高校の教育への支援について、お伺いしたいのですが、奥尻高校は町への移管のあと、まちづくりワークショップを始められたと聞いています。その辺のことに対して、町の人はどんな感じで対応されましたでしょうか？あるいは、教育委員会としては、どんな感じで対応されましたでしょうか？

桜花事務局長：高校が発信したアイデアの一つで、もともと町民自体が子どもたちのためだったら力になりたいという人も多く、まちづくりワークショップで例えば漁業だったり、観光業だったり、建設業だったり、色々な職業のリーダーみたいな人を講師として迎えて、いろんな話を聞き今後に活かすというのが、ワークショップだと考えています。そういう話を聞いて、子どもたちも将来のことを考えたり取り組んだりということは、ほかの町じゃ実践していないような取り組みでもある。自分たちの町を知るということは、ふるさと教育の一環にもなり、子どもたちの成長につながる取り組みであるが、町民にとっても一層子どもたちのほうに目を向けることになり、町民も奥尻高校が町立高校になって、前とは違うなみたいな意識は生まれたと感じています。

――これは、桜花さんの感覚というか感想で結構ですが、住民の方がまちづくりというか、奥尻高校のことに対して能動的というか積極的な感じを受けたのですけれども、それはこの島全体の雰囲気としてそうなのでしょう？

桜花事務局長：それはあると思います。小中学校にすでにコミュニティースクールを導入していますが、ほかの町よりはスムーズに導入できたことはもともとそういう地盤ができていたという部分があるからであり、高校にはまだコミュニティスクールを導入していませんが、内容的には地域の力をたくさん借りながら、いろんなことをやっているのでコミュニティースクール的要素は高いと考えています。

もともと地域性なのか、子どもたちのためなら何かしてあげたいという大人が多いこともプラスに働いています。

――そうした、子どもたちのためなら何かしてあげたいという気持ちは、どこから生まれてきたのでしょう？

桜花事務局長：子どもをかわいくない大人はあまりいないような気がします。

――奥尻の皆さんはかなり町の活性化、そして、高校の活性化に前向きだなという感じがするんですけども。

桜花事務局長：お年寄りだって、若い頃はあったわけで、子育ての経験もあります。例えば小中学校の運動会といっても、近所のお年寄りも来てくださいと案内している学校もあります。

先程のコミュニティースクールじゃありませんが、地域と共にある学校づくりを推進しているなかでは、町民も学校に協力し子どもたちに感謝されたらうれしい気持ちにもなるし、そういうことが積み重なり町自体がそういった学校だったり子どもたちだったりに対して協力的な町になってると思うんです。

小さな町だから、多くの方が知り合いみたいなところがあるので、親戚じゃなくても近所に子どもがいて、何か困っていたら「どうした？」みたいなところがあるし、地域同士のつながりができています。学校と地域もつながっています。災害を経験した町ですけども、地域との協力体制ができている町であると感じています。

――私も日本のあちこち行ったり、あるいは、話を聞いたりしている中で、例えばさっきの災害の話ですが、災害時に立ち直る動きが速かった地域と、あまり早くはなかった地域がありました。今、桜花さんがおっしゃったような協力するような人間関係ができていたところが早かったわけです。しかし、じゃあ、その人間関係ってどうやってできたんでしょうねって聞くと、「さあ？」というふうになってしまうんですけども。

桜花事務局長：信頼関係は日々の積み重ねと考えています。

――昨日、高校で聞いたのですが、地域に出ていって、地域の人がほんとに応援してくれる、関心を持ってくれるということを先生も生徒も感じている。それは、桜花さんも感じられますか？

桜花事務局長：そうですね。隠岐島前高校のある海士町へ自分も行ったことはあります。海士町の町内を歩いてたら、すれ違う子どもたちからあいさつされ、すごく声を掛けられるので、都会から来る人は、そういうのに驚いたりしますけど、この町もあいさつを積極的に行っていると感じています。

――住民の協力があるなって感じられた瞬間は、例えばどんなときがありましたでしょうか？

桜花事務局長：学校教育の面ですか？

――高校教育に対して。

桜花事務局長：何か困ったことがあるたびに協力しています。例えば社会科見学とかでどこかに行きますってなったときも、快く受け入れてくれる施設が多いと感じています。敬老会の方だったり、女性団体の方だったり、講師として調理協力なども、積極的に協力していただいています。

――そういうときの反応は、かなりいいですか？

桜花事務局長：いいと思います。

――これも昨日、高校で聞いたのですが、スクーバ（スキューバダイ

ビング）に関しても、町立移管したあと、新たに住民が支援するような体制が発展したと聞いています。

桜花事務局長：もともと奥尻は、北海道で一番最初に潜水器漁業という漁業が根付いたところで、潜水器漁業者の団体も幾つかあり、協力をお願いしています。中には卒業生もおり、その漁業者の中には、奥尻高校のスクーバ授業を選択し、潜水士の資格を取得した漁業者もいます。

――平成七年以前には、どうしてそういうシステムにまで発展しなかったんでしょう？

桜花事務局長：道立高校の先生は、地域の協力を仰いでまでという発想にならなかったのではと考えます。でも、道立高校時代の考え方なので、個人的な表現にはなりますので正確にはわかりません。

ただ平成七年からスクーバを始めたきっかけは、聞いているところでは、平成五年に北海道の南西沖地震があって、町の将来を危惧した町の理事者（町長）が、スクーバで、奥尻の海のきれいさ、素晴らしさを知ってもらうため、地震による津波で作られた海は恐ろしいというイメージを払拭したいため、スクーバを導入したと伺っています。

――町長さん、町側がそういうふうな思いを最初にお持ちになって。

桜花事務局長：はい。だから、町で予算を出すので、高校でやりませんかとかっていって、それがきっかけであると聞いてます。

――先ほどからお話の中で繰り返し印象を持ったのですが、町長さんが、町立にしたいと思われたり、今のスクーバに関しても、町の側から提案されたり、町、あるいは住民としては、高校のことをチャンスがあればサポートしたいという気持ちは、ずっとあったということなのでしょうか？

桜花事務局長：そうでしょうね。中学校までは市町村立の学校で、高校になると市町村立高校じゃないから、知りませんよという話ではないと思うんです。子どもたちは、町の子どもたちですからね。今来てる島留学生だって、出身は違いますけども、奥尻高校の生徒であり、住所も移してるし、一人の町民であるのに変わりはないと思います。

――町の子だという意識ですか。

桜花事務局長：そうです。理想を言うと、島留学生も三年間奥尻で暮らし、大きく成長して、ふるさとに帰ったりして奥尻の三年間、すごく人生経験の中で貴重な三年間でよかったと言ってもらえるといろんな宣伝にもなるし、そういう人たち、羽ばたいた人たちが、また奥尻に戻ってきて働いてみたりとか、移住者、定住者につながったりすると、町としてはこの町立移管や全国募集をやってよかったなというふうになると思います。いずれそういう時代は来ると思うんです。まだ三年目なので、実績はないですが将来は必ず島に定着する子どもたちがでてくると思っています。

――いわゆるＳターンも頭の片隅にはあるということでしょうか。

桜花事務局長：こういう取り組みをしてないと、そういうのも生まれないですからね。やっぱり元々の住民というのは少なくなる一方なので、町の機能を維持するためには、外から人が来ないと今後は衰退する一方となります。

――昨日、高校生にインタビューしてとても興味深かったのは、対象者は島外から来た二人だったのですがこの島が好きだといっていました。ただ、その好きだという言い方が、生まれ育った生徒さんが言うのとは違う言い方でこの島としっかりと向かい合った上で好きだと言っているのがとても印象的で、ＳターンというのはＵターンとは違うかたちで起こるのかなということを感じました。

桜花事務局長：島留学生制度も不安を抱えていて、隠岐島前高校でも最初は、なかなかうまく定着しなかったけども、ある程度軌道に乗ってきたらというのは聞くので、そこは急ぐ必要はないとも考えています。

４　教育委員会のかかわり方

桜花事務局長：将来の一番の課題は、市町村立高校の施設整備。生徒への様々な補助については、全国募集の生徒を取り合うのではなく、教育内容の魅力ある取り組みを充実させることが大切。管理職の先生が若い先生を育てています。

――先ほどは移管のときの町の教育委員会の関わりをお伺いしましたが、いま現在は、町の教育委員会としてはどんな関わり方をなさってますでしょうか？

桜花事務局長：その関わり方というのは、どういった部分を指していますか。財政的な部分とかですか。

――財政的な部分と、それから、町民と高校とをつなぐときの支援。

桜花事務局長：基本は、今までもそうですけども、高校は独自でいろいろやってるので、うちがそんなに入ったりすると、スピード感もなくなったりします。何かあったら責任を取るのは市町村立高校の設置者である教育委員会になります。募集事項は高校から相談があれば相談したりもします。

基本的には高校の自由な発想を尊重し、それやっちゃ駄目、あれやっちゃ駄目とかというのは、今までもあまり言っていません。一定のルールはあるので、ここは相談しなきゃならないなというのがあったり、調整事項は教育委員会が入った方がスムーズにいったりするようなところがあれば、やっています。

支援の中では、島留学生のいろいろな負担軽減の部分で、条例化だったり制度設計だったりをしているので、そういうのが今後ずっと継続していくと思います。

これから地域留学しようという学校が、隠岐島前高校や奥尻高校の例を見て、財政支援をもっと充実したものでやるとなったときに、例えばうちは今、下宿の補助でいったら三万円の月額補助をしていますが、ほかのところが、じゃあ、うちは五万円出しますとしたときにそっちへ生徒が流れるかもしれないけれども、それはそれだと思っています。

そういうのよりは、やっぱり魅力ある取り組みをどれだけやっているかということは、ぶれずに進みたい。一時的に他の高校に取られても、自分たちの取り組みに自信を持ってやっていれば、自然と結果はついてくるのかなというふうに思っています。

補助制度でいったら、他にも幾つかあります。スクールバスを無料にし、島留学生への昼食も補助したり、帰省する経費も生徒は四回、保護者は二回まで上限を設けて二分の一補助しています。これらはほかの地域でもやっていますが、現状は今後もそういう補助を継続しつつ、いずれ人数が増えすぎたりしたときに見直しも検討するものと考えます。うれしい悲鳴なのかもしれませんが、それが三年後か、五年後かわかりません。まだまだ課題もないわけではないんですよね。

一番の課題でいったら、市町村立高校の施設整備の部分です。この辺は、補助制度がないので、小中学校を建てるとかというのと違って、いずれ大きな課題になってきます。同じ規模で高校を建てるとなったら、数十億円以上になると思います。起債はつくかもしれませんが、今後どう判断するのかなというのは心配です。

――なるほど。

桜花事務局長：隠岐島前高校は、県立高校のまんまやってますからね。逆に隠岐島前高校へ行ったときに、市町村立高校にしたらいろんな独自の取り組みがやりやすくて、それもいい方法ですねみたいな言われ方はしたことがあります。いい面はあるけど、反面、マイナスになる部分もあるため、今後も慎重に進める必要があります。

――日本のあちこちの高校を回らせていただいたり、私自身もある高校とは六年間お付き合いさせていただいて、カリキュラム開発とかもやっていますが、町に移管した後の奥尻高校さんの町との協働の在り方はフットワークが軽くて、生徒にとっての居場所、ほんとにまなびしま奥尻になっていると感じました。

生徒インタビューでは、都会では自分の住んでるマンションの隣の人は知ってても それ以上の人は知らない。そして、学校も五クラスも六クラスもあるから、よく知らない友達がいたりする。奥尻は、都会で暮らすのとは全然違う生活があって、町の人に支えられながら、いろんなチャレンジをしたり自己実現をするようになっていて、生徒さんの言葉では、中学時代までと比べて自分は成長したと言っていました。奥尻高校ではかなり充実した生活を送っているのだろうと思います。

桜花事務局長：小規模校だからできることというのは、確かにあるかもしれないですけども、先生たちがすごく頑張ってくれているというのが幸いです。

――そうですね。小規模なのともう一つ言えば、生徒も先生もほんと

に主体的、自主的に活動されていると感じます。

桜花事務局長：先生たちも、今、割愛人事でここにいるというだけで、いずれまた道立高校に戻ったりします。

――それもお伺いしたかったんですけども、前校長の俵谷先生、現校長の清水先生を始めとして、ほんとに奥尻高校のために先生になったような、そういうセンスのある人が続いてますけども、町から道に対してこういう人が欲しいというふうにリクエストできるのでしょうか？

桜花事務局長：小中学校と違い、高校の人事は、北海道一円なので、奥尻にいる人が利尻・礼文とかに行ったりもするし、全道一区なので、基本的に選んだりなどできません。

校長先生のリーダーシップは大事ですし、まだ町立になって清水校長で二人目ですが、いずれお二人とは違うタイプの先生が来るのかもしれないですけども、道教委の人事担当の方も、市町村立高校に派遣する校長先生については、教育長にも相談があったり、それなりの人材を優先して斡旋してくれるので、ありがたく思っています。

もともと離島の学校は、高校だけじゃなく小中学校も初任者が多かったりします。そんな中、初任者の先生もみんな頑張ってくれます。前任の俵谷校長が言っていたのは、やる気のないベテランの先生よりは、やる気のある若い先生がたくさんいたほうが、戦う集団じゃないんでしょうけど、そのほうが全然いいよと言っていたので、その辺は管理職がうまく人を育てているのかなと思います。

清水信彦校長

――奥尻高校訪問中に、リーダー的な先生と一緒に授業を見て回りました。授業はワークショップ的なものだったのですが、その先生はポイント、ポイントをかなり的確に押さえておられて、その場で若い先生と話をして、若い先生が気付くように、教え込むのではなくて気付くように上手に話をされていました。あの先生がいれば、大丈夫だろうというふうな人を俵谷先生は育てていかれたのかなと思いました。

桜花事務局長：子どもたちも育っているかもしれないけど、先生たちも育っているという面ではうまく回っていていいのかな。そういうときは、私たちは静観して、頑張ってくださいで、何か困ったときだけ前に出るみたいな感じで全然いいのかなと思います。

――奥尻町教育委員会としては、町に移管して今のところ成功しているというふうに、そんな見方をしていますか。

桜花事務局長：対外的にはそういうふうに伝わっていますけども、やっぱり財政負担というのは大きく、来年以降、役場庁舎の建設事業も進むので今後の学校運営を危惧しています。北海道南西沖地震で、いろんな財政出動が嵩み、給与を削減したり、貯蓄的な基金なども全然なく。以前は庁舎建設基金などもありましたが、取り崩し、一般財源に回す時代もありました。（町立移管の財政面では）もうちょっと年数がたったときに、島留学生が奥尻に就職したりし、ほんとの人口増につながったりすることが一番の説得材料になってくると思っています。町立移管して交付税でこれだけ入ってくるよと言っても分かりにくいと思うんですよね。地元の子どもに補助しないのかという意見もよく聞きますが、外から来る子は、それなりの負担、覚悟を持っているので、支援しなきゃならないと思います。

5　インタビュー後のフリートーク

――魅力化の高校は、多くの場合が教師も生徒も地域に出ていきます。地域の人の協力がなければ、成り立たないような高校教育になっていると思うんですけども、私どもが見てきた範囲では、その過程で地域の人もとても成長されるというか、強くたくましくなられていくという側面があると思うんです。とりわけ高校生が来ると、よっしゃ、助けてやろうみたいなかたちで、町のもともとのリーダーじゃない人たちも、それまで元気がなかった町民も、高校生が来ると、よっしゃ、手伝ってやろう、支えてやろうというかたちでたくましくなっていくというところをたくさん見ています。奥尻島でもそういうようなことは起きていますでしょうか？

桜花事務局長：島おやの話とかって聞かれましたか？

――少し聞いてます。

桜花事務局長：そういう人たちがまさにそうだったり、さっき言った町おこしワークショップに協力する方々。それにエントリーしてない人たちでも、たまたま自分がその状況になったら、可能な範囲で協力はすると思います。

――具体的に何か例があったら、教えていただけるとわかりやすいと思うんですけど。

桜花事務局長：ほんとに「島おや」とか「島おじ」、「島おば」の制度で、家族みたいなつながり、付き合いをしている方もいるし、島おやとなって、島留学生が自宅に泊まったりとかもすることもあるんです。里帰りしたらお土産買ってきてくれることもあり、島おやになって良かったとの声も聞きます。

先日もキャリア教育の一環で、いろんな事業所に子どもたちが行きました。教育委員会でも生徒を受け入れていますが、受け入れ先の事業所もたぶん増えていると思います。受け入れ先の調整は学校の担当の先生たちが中心となって実施していますが、先生たちは、結局は長くても五年ぐらいで異動してしまいます。先生方は、何年か暮らせば地域とのつながりもできますが、新しい先生達は頼んだりとかというのも、引き継ぎとかではあるかもしれないけども、難しい場合がある。そういうときのサポートは、教育委員会が行ったりしており、教育委員会がサポートすることで、フットワークは軽いと思います。

――実は、国レベルでは財政諮問会議とか、まち・ひと・しごと創生の会議の閣議決定で、高校がきっかけとなり町を元気にするという方針を出しているんですけども、そういったところは、奥尻では起きてますでしょうか？

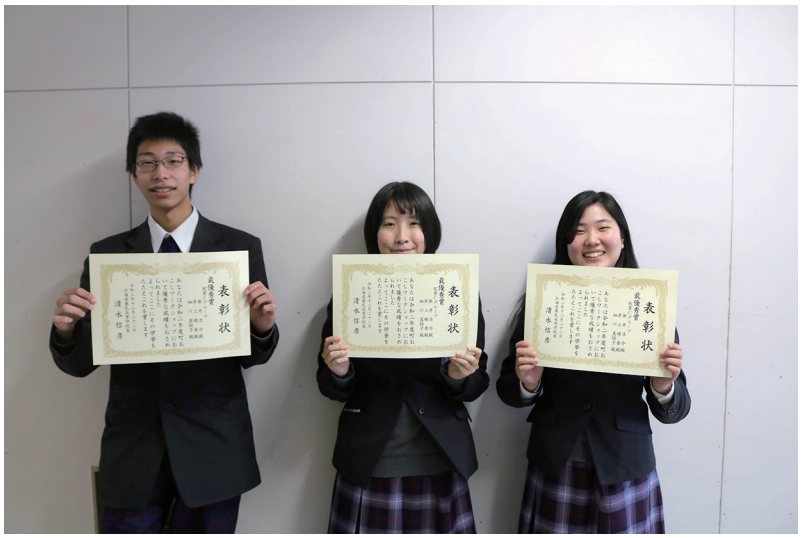
桜花事務局長：高校生が町の課題をいろいろ考えて、町長へ政策提案するという取組みを実施しています。これも日が浅い取組みでありますが、高校生の発想をヒントに町の担当者もいろんなこと、考え、町の職員にとっても、そういう刺激にはプラスに働くと考えます。

高校生の発想が刺激になって、町とか町職員も今までできなかったことが、できるようになれば、直接的に高校が核となって動いて、何かをやりましたという成果が生まれます。いろんな効果は期待できるのかなと思います。いずれはそういう時代が来ると思います。

――いずれじゃなくて、近い将来そんなことが起きるだろうと思います。ほかの県の事例でいうと、高校生がそこの町にある、忘れられていた資源や在来の植物、食べ物であったり、観光資源であったり、それから文化資源であったりとかに着目してそれをどうにかしようとしてる姿を見て、そういえば自分の周りにもあれがあったなとか、そういえば言われてみればこれを使うこともできたなというようなことで、町の人が町おこしに取り組むというようなことが、まだぽつぽつですけども起きてきているので、この島でもたぶん起きるだろうと思います。

桜花事務局長：自然が残ってる部分では、都会にはないようなものもたくさんこの島には残ってるので。奥尻にもともと住んでる自分らは気付かない部分も、都会から来る子だったら気付いて、これって当たり前かもしれないけど、素晴らしいことだよというのを逆に気付かされ、それが観光資源につながったりする場合が考えられます。

――そういうことが増えてくるだろうと思います。高校をなくさなく



てよかったなというふうに、全国の離島・中山間地域が、だんだんそう思ってきていますので、ここもそうなると思います。時々奥尻を訪問させていただき、そうなる過程を確かめたいと思います。

桜花事務局長：自分らも町立移管で北海道はすごくいろんな支援をしてくれ、それの一番の恩返しは、町立高校に移管して、すごくよくなったねとか、生徒の全国募集もどんどん増えてきたりとかっていう実績を積むことが、北海道への恩返しにもなるしというふうに思っています。もちろん、北海道だけじゃなく、応援してくれるいろんな大学の先生や、ほかにもたくさんおりますが、企業も含めて支援してくれるところには、そういう面で恩返ししていければなと思います。

――高校魅力化の地元では、かなり強力なチームが、町の中で大きく広がっているというのを感じることがあります。

桜花事務局長：町長も「チーム奥尻」というキャッチフレーズで、町一丸で島を盛り上げるために何ができるかと普段より言っています。町民も含め、町職員が一丸となって今後もまちづくりを進めるため、高校を核とした取組を発展させて行けたらと考えます。

――奥尻では、自分の住んでるところをよくするために、一生懸命になってみたい、工夫してみたい、楽しみたいみたいな感情であって、この感情は普通の人間的な感覚から生まれていて、その普通の人間的な感覚が、長いこと表に出すことができなかったのが高校魅力化をきっかけに出せるようになったのだと思います。

一度出るようになると、じゃあ、あれもやってみたい、これもやってみたい、これは楽しい。大人の能動的な地域愛を見ている高校生も、これは楽しそう。だから、私もやりたい。こうして相乗効果が生まれて、高校生が楽しんでると、大人も楽しもうということで、どんどんあとは増殖していると感じています。

桜花事務局長：相乗効果は、やっぱり小学校の先生たちも、高校生の取り組みを見てて、「高校生はすごいな」とかって言ったりしてるので。そういうことは、小学生の子どもたちにも聞こえているので、小学生も自分が高校生になるときには、ああいう高校生になりたいという、目指す目標みたいなのにできれば、もっともっと町自体が元気になっていくのかなと考えます。

――まなびじま奥尻の後ろにたのしみ島奥尻というのが背景にあると、すごいまなび島になるんだろうと思います。今、高校の中を見てると、そういうのがどんどん始まろうとしてるなというふうに感じますので。

桜花事務局長：学校へ行くと楽しそうですもんね、みんなね、先生たちも含めて。自分たちも子どもたちの明るい笑顔を糧に、奥尻の未来のため、頑張って行きたいと思います。

――それでは、今日はありがとうございました。